

TORN LAND

手のプロジェクト

2020年211日間の記録

クラフト工房 LaMdhO



おんなじ日に種を植えて、

遠くの仲間に想いを馳せる。

綿ができたら持ち寄って、

それを紡いで糸にしよう。

会えない時間に育んだ、

想いを糸に紡いでみよう。

綿ができたら再会しよう。

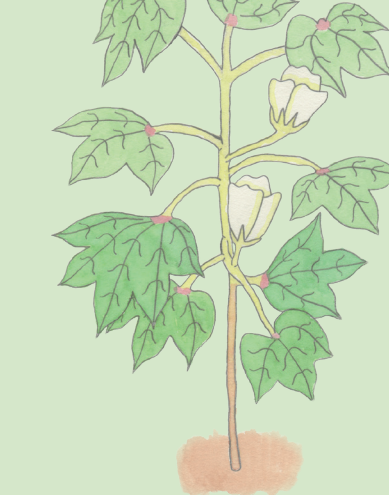
種を蒔いてから、谷川俊太郎さんの詩集『みみをすます』を手にとってみたんです。種は見えないので、土の下でどうなってるんだろうってイメージを働かせています。

発芽だけが種の生きる道じゃない。搾って油になったり、油かすは牛や豚の肥料になったり。色々な生き方がある。

夜見ると、寝てるんだよね。葉っぱが寝てるの。そして朝4時か5時くらいに起きてるんだよね。



大きな木も、1本の草も、そこから動くことができない今の我々も、動かずとどまることで、風が吹いてきたり、鳥が飛んできたり、星が流れたり、空や雲が動いてることに気がつける。



普段生活している中で、服を着たり、布団で寝たり。それらの原点を感じることができる時間。

糸に触れている時間、別の次元にしているような感覚になる。意識していないことを思い出したり、内面的な旅をしているような。世界との距離感を変えたり、感覚のチャンネルを入れてくれるものが、糸だったりする。



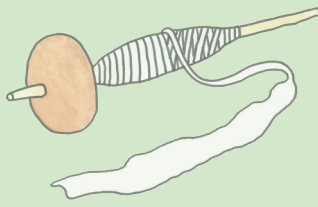
手で止めてる場所が「綿」と「糸」の境界線。

紡いでいる糸が切れてしまったときは、無理矢理つなげようと捻るのではなくて、つなぎ目にそっと手を添えてゆっくり回してみる。友達をつくるように、歩み寄って待つ。

上手くいかなかったけどまたほぐせば大丈夫。

一条一条が自分のその日の存在を証明するものになっている。自分が昨日つくったものが残っているから、そこに自分の姿をみることができる。

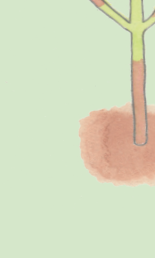
糸紡ぎは、一人では結局できませんでした。人生のようですね。



これまではラマノに集っていたが、各家に綿の種が届き、綿との生活が始まった。



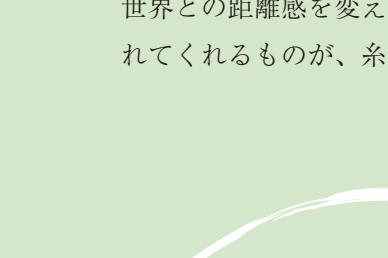
出てくるかなあって気持ちで1年過ごせたら、それはそれで幸せかも。



生まれて初めて育てた植物が綿花でした。



なんと、私、63cm。



紡ぎながら何かを思考する。そのときの気持ちや内面が表れる。

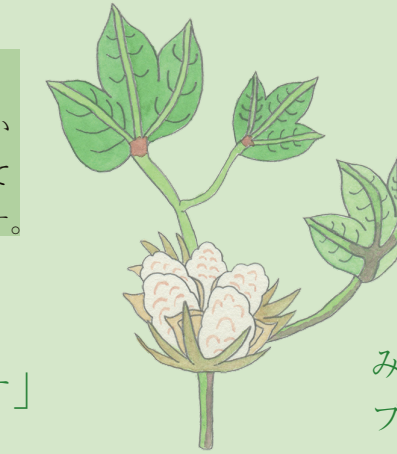


いつしか、糸が自分を映し出す鏡のようなものになっていく。

やっとお会いできましたね。

211日目 12/12

再会、糸を紡ぐ

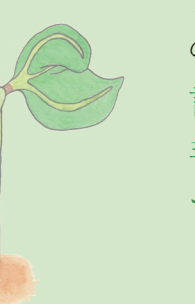


さっきそこで採った綿から種を取り除いて、ほぐし、撚りをかけて引くだけで糸ができる。それが全て。高級ブランドの服も、ファストファッションの服も、全部そうやってできている。

みんなで手を動かして糸をのばしていくように、プロジェクトが広がっていくといいな。

種の表面にあるフワフワした部分がある程度取り除いて、土に触れるようにしてあげないと、種が蒔かれたことに気づかないんです。「あ、蒔かれたぞ。発芽しなきゃ」と思うんです。

条件が一緒だったとしても、同じように芽が出るのかっていったら違いますよね。それはもう種の持って生まれた特徴と捉えるしかなくて。



ラマノには言葉でコミュニケーションするのがあまり得意ではない人たちが多く、言葉じゃないものづくりや手しごとを通じて、人がつながっているような世界がある。



ラマノはスペイン語で「手」という意味。

「衣食住」はすべて、「土と太陽と

ちょっとの雨」で出来上がってる

ってことが、頭じゃなくて体感できる。

私のは、マイナス10cmぐらいだと思います。まだ発芽の様子はないんです。見守っています。



ラマノのメンバーの一人が巻いた糸玉は、丸ではなくてダイヤの形。

人が糸を巻くと、その人らしさが形になる。

スピンドルを制するものは世界を制する。

切れたときは、のせて回すだけ。ラマノのメンバーに接していると、きも、歩み寄って待つことが大事なときがある。

糸紡ぎに必要なのは勇気。糸の出だしを見る。勇気を出して、引いてみる。何度も何度も失敗して、切ってください。その人は必ず上手になります。

「糸口を見つける」とか「よりを戻す」という言葉は、ここから生まれたんですね。

手のプロジェクトとは

クラフト工房 La Mano (ラmano) が、TURN LAND のプログラムの一環で2018年3月にスタートしたプロジェクト。アーティストの五十嵐靖晃とともに、「手」にまつわる行為や所作、表現に着目し、地域の方々や一般の参加者とともに一から畑を耕し、綿づくりを行っています。

クラフト工房 La Mano について

障害児の造形教室を前身とし、1992年に障害のある人たちが生き生きと働ける場として東京都町田市に設立。「La Mano」とはスペイン語で「手」を意味しており、障害のある人たちがものづくりや手しごとを通して社会とつながることをモットーに活動しています。植物染料・天然繊維を使った織り、刺繍、染め、絞りの商品を企画製造販売しています。

このプロジェクトは、東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、特定非営利活動法人 Art's Embrace、国立大学法人東京芸術大学が主催するアートプロジェクト「TURN」の一事業「TURN LAND」として実施しています。

<https://turn-project.com>

TURN

2021年3月発行 発行：クラフト工房 La Mano イラスト：卓達太郎(クラフト工房 La Mano) 手描き文字：井上貴嗣、尾崎文彦、天神すずか、福田溪輔(クラフト工房 La Mano) デザイン：伊藤萌里 編集：米津いつか 編集協力：岩中可南子、村方光沙子(NPO法人 Art's Embrace)

211日の綿との生活、紡いだ言葉たち

クラフト工房 La Mano(以下、ラmano)の利用者であるメンバーや一般参加者など、様々な背景を持つ人たちがラmanoに集い、綿花を育て、一本の糸を紡いでいく「手のプロジェクト」。今年で3年目を迎え、回を重ねるごとに少しずつ活動の輪が広がっていきました。しかし新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けてラmanoに集まるのが難しくなり、2020年2月以降「手のプロジェクト」は休止しました。

綿の種蒔きの季節である同年5月、いまだ緊急事態宣言下でしたが、この状況でもできる活動として「テレ手のプロジェクト」を始めることにしました。「テレ(tele-)」とは「離れた場所」を意味します。ラmanoのスタッフやメンバー、一般参加者がオンラインでつながり、それぞれの家の庭やベランダで同日に種蒔きを実施。その後も定期的にオンラインを活用しながら、Tokyo Cotton Village のトミザワタクヤさんのアドバイスのもと、綿花の栽培や糸紡ぎなどを行ってきました。

活動の現場がラmanoからそれぞれの日常に移ったことで、人と綿との関係性に変化があり、様々な発見や気づきがありました。このアーカイブでは、離れた場所で種を蒔き、育った綿を持ち寄ってラmanoで再会するまでの211日間で生まれた言葉を記録しています。

2021年3月

「手のプロジェクト 2020 ― 綿花から糸へ・・・」2020年度プロジェクト概要

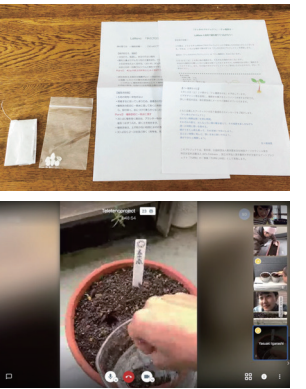
[vol.1] 1 日目：種を蒔く ----- 5月16日(土) 14:00～15:30 [オンライン開催]
[vol.2] 44 日目：触れてみる ----- 6月28日(日) 14:00～15:00 [オンライン開催]
[vol.3] 92 日目：背丈をはかる ----- 8月15日(土) 14:00～15:30 [オンライン開催]
[vol.4] 177 日目：スピンドルをつくる --- 11月 8日(日) 14:00～15:30 [オンライン開催]
[vol.5] 211 日目：再会、糸を紡ぐ ----- 12月12日(土) 13:00～15:30 [ラmano現地開催]

※ 2021年3月14日(日)13:00～15:00 に、vol.6として糸紡ぎと1年の振り返りをオンラインで実施。

vol.1 5/16

新型コロナウイルス感染症拡大の状況下、3年目を迎える「手のプロジェクト」は、初めてオンラインで開催しました。参加者には事前にラmanoから一通の手紙と数粒の綿の種を送りました。これまでのようにラmanoに集まることができないため、種を蒔くときのポイントを画面越しに確認していきます。ラmanoのメンバーや関係者、一般参加者など、東京だけでなく埼玉、千葉、神奈川、岐阜、北海道などから集まった27名が、それぞれの庭やベランダで一斉に種を蒔きました。

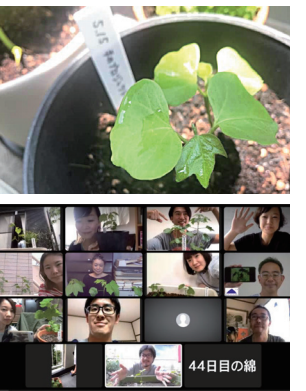
1 日目 種を蒔く



vol.2 6/28

前回、一緒に種を蒔いたメンバーが再びオンラインで集まりました。育った綿花の芽や葉を手で触りながら、綿花と過ごした時間について語り合いました。ラmano施設長・高野によるラmanoの綿花畑ツアーを行い、アドバイザーのTokyo Cotton Villageのトミザワタクヤさんからは今後の成長に必要な育て方のポイントを教わりました。プログラム終了後には個別相談会も実施。芽が出ない人もいましたが、種にも様々な役割があることを知り、それぞれの形で綿花と触れ合う時間となりました。

44 日目 触れてみる



vol.3 8/15

夏真っ盛り。種を蒔いた日から92日目のこの日は、それぞれの綿花の成長をさまざまな観点から測定しました。背丈の他に、茎の太さ、葉っぱの大きさ、花の数。背丈が高いからといって花の数が多いわけではないことや、背丈の大小で葉っぱの数に大きな違いがないことなど、さまざまな特徴がみえてきました。参加アーティストの五十嵐からは、コロナ禍での自分たちと重ね合わせ、「止まっていることで、星の動きや風が吹いていることなど、新たに気づくこともある」という視点も共有されました。

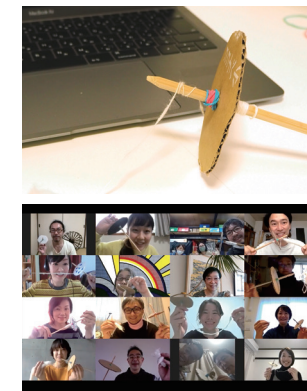
92 日目 背丈をはかる



vol.4 11/8

秋を迎え、参加者の家の庭やプランターでも少しずつ綿の収穫が始まりました。ラmanoから届いたキットと、ダンボールなどを組み合わせて、綿から糸を紡ぐための道具「スピンドル」をつくりました。トミザワさんに教わりながら、糸紡ぎにもチャレンジ。画面越しのトミザワさんはふわふわの綿をみると一本の糸にしていけます。しかし、いざやってみると難しい。普段着ている衣類ができるまでの仕組みをあらためて知り、参加者は真剣な眼差しで綿と向き合いました。

177 日目 スピンドルをつくる



vol.5 12/12

今年度はオンラインでプログラムを重ねてきましたが、この日は新型コロナウイルス感染防止対策を徹底しながら、各自が育てた綿を持ち寄り、ラmanoでの再会を果たしました。まずは焚き火を囲んで、一般参加者やスタッフの自己紹介。ラmanoの綿花畑で綿を収穫したあとは、縁側でトミザワさんによる糸紡ぎの実演とレクチャーが行われました。参加者は糸を紡いだり、お茶を片手に一息ついたり、思い思いの時間を過ごしました。自然あふれるラmanoで五感を使い、共に過ごす時間の豊かさを感じる1日となりました。

211 日目 再会、糸を紡ぐ



photo: asako okawara

vol.5開催ウェブレポート <https://turn-project.com/timeline/diary/12325>

綿と La Mano のある暮らし

五十嵐靖晃(アーティスト)

2020年は、新型コロナウイルスの影響でラmanoに人が集うことができなくなったため、それぞれの家で同じ日に綿の種を植えて、その成長をオンライン上で共有し、綿ができたらそれを持ってラmanoで再会することを目指した。こうして迎えた春、ラmanoから綿の種が届き「綿のある暮らし」がはじまった。芽が出るかどうか分からない地中の種を想像する時間は「待つ」ことを楽しみに変えた。同じ日に植えても差ができた成長は“違い”を個性に変えた。夜に葉を下ろし眠る姿には驚かされ“あたりまえ”を発見に変えた。

そんな中、綿という物言わぬ存在と向き合っている感覚をどこかで体験したことを思い出した。そう、ラmanoのメンバーと向き合っている感覚とよく似ているのだ。彼らは言葉でのコミュニケーションはあまり得意ではないため、どこか植物的なところがあり“共にいる”ことで、私に様々な気づきや変化をもたらしてくれた。

春に届いた綿の種は、ラmanoに流れる時間や空気感、そこで大事にされている感覚にスイッチを入れる種、いわばラmanoの種だったのだ。それぞれの家に種になってラmanoが届いたのである。

ラmanoと暮らした一年。私は、今朝見上げた空の青さは昨日よりも薄いのに気づき、窓から見える夕日がこれからどの位置に沈むかが分かるようになり、今夜の三日月は昨夜よりも赤く低い空に浮かんでいることを知るようになった。机の端の小皿の上には次の春に植える綿の種が並んでいる。

五十嵐靖晃(いがらし・やすあき) 人々との協働を通じて、その土地の暮らしと自然を接続させ、景色をつくり変えるような表現活動を各地で展開。美術は多様な人々をつなげるものとしてあると考える。TURNには2015年から参加し、ラmanoとの関係を継続しながらブラジルやペルーなど国内外でプロジェクトを展開。

会えない距離と会えた距離をつなぐもの

高野賢二(クラフト工房 La Mano施設長)

3年目となる「手のプロジェクト」の綿の種蒔きが、まさか「リモート」での実施になるとは想像もしていなかった。種を蒔くには、よい土が必要だ。毎年3月には参加者の皆さんと種蒔きに向けての土づくりを行ってきたが、開催中止となった。これまでも地域とのつながりや関わりを大事に、ものづくりや手しごとを通して人と交わる場所を模索してきたが、場に集えない状況が生じた。

新型コロナウイルスの影響は、種蒔きだけでなく、ラmanoが始まって以来初のメンバーの在宅作業という、これまでの当たり前が当たり前でなくなる始まりでもあった。場が当たり前前にあり、そこに人が集い、綿を育て、糸を紡ぐ。その場に集う距離間から、それぞれが綿を育てる距離間に……。場に集えない距離間だからこそ感じる距離があり、身近に綿があることでの綿を感じる距離がある。それは、ラmanoの活動でも同じで、メンバーのいないラmanoは、単なる箱で時間が止まったような距離を感じた。緊急事態宣言解除後、徐々にメンバーがラmanoに戻ってきて、少しずつ時間が動き出した。当たり前前のことが当たり前でなくなった時、人々は不満や不安を感じると思うが、同時に、これまでの当たり前が実は恵まれていたことに気付くきっかけなのかと思う。

「福祉」とは、言葉を調べると「幸せ」や「ゆたかさ」である。きっと、この感じた距離間は、本来、人が感じる「幸せ」や「ゆたかさ」が何なのか、それぞれをつなぐ未来への思考の距離感なのかもしれない。その思いをつなぐためにも、今年も種を蒔かなければ。

高野賢二(たかの・けんじ) 1976年生まれ。福島県出身。学生時代に東京で染色を学ぶ。2000年クラフト工房入社。染色担当の指導員として、障がいのある人たちとのものづくりを行う。2006年にはアトリエ(アート活動)を始動し、メンバーの絵を使ったプロダクトの企画のほか、外部と共同でのものづくりを進めている。